

琉球大学学術リポジトリ

畜産懇談会雑記

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石垣, 長三 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20207

畜産懇談会雑記

本学部普及事業の一環として

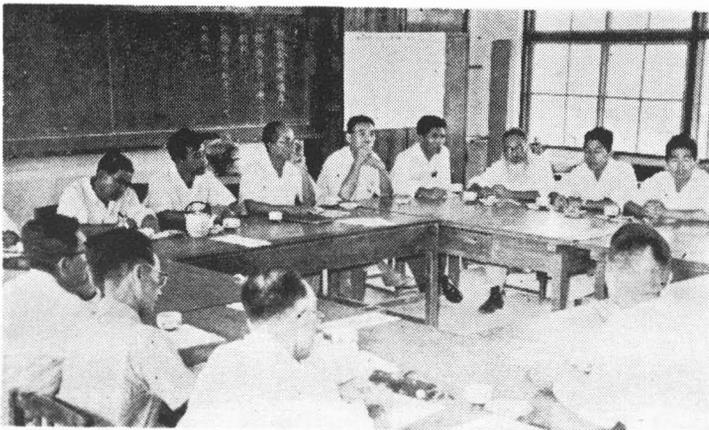
去る九月三、四、七の三日間、各地区毎に駐在技術員、経済局畜産課、種畜場、血清所、農林高校等の関係職員にお集りを願って、畜産懇談会を実施する機会を得たが、第一線指導陣の予期以上の技術振興に対する熱意と真しな研究的態度に沖繩畜産の発展は期して待つべしの感を深くしたものである。討論並に懇談事項は各地によって多少の相違はあったが、やはり基幹家畜としての豚と新興産業としての養鶏の問題が中心であった。今、会議録中から二、三の問題をりあげ、私見を加えて養畜家の参考に供することにします。

一、最近鶏の白血病が各地に散発的に発生し、相当の被害を与えているようである。養鶏家各位は最善の予防対策を講ずる必要があります。発生例は種畜場、琉大、名護、与勝、糸満、与那原の各町村であるが、白血病そのものが新しい病気であるので病名不詳で斃れたものに相当の白血病罹病鶏がいるのではないかと推測されます。このことについては本紙一月号に詳しく載っていますがはじめて読まれる方のため念のため病気の症状、伝染経路予防等に関し簡単に説明を加えることにします。この病気は普通の顕微鏡で見ることのできない小さな「伝染毒」によっておこるものです。これにおかされた鶏は、①肝臓が極度に肥大し表面に小さな白斑が生ずる、②羽が垂れ脚弱となって運動機能が麻痺する、③眼の色が灰色となり、腫孔が不正形となって視力を失う、④脚部が肥大する等々、様々な症状を現わすようですが、割合に発生

例の多いのは①と②のようです。伝染源は病鶏の排泄物、唾液、種卵等で大体ふ化一か月以内で罹病するのが多く、産卵開始時になって、バタ、バタ斃れるのが特徴です。現在この病気の特效薬はありませんので努めて罹らないように予防対策を講ずるようにしなくてはなりません。即ち、ひなは信用ある種鶏場で、しかも無病地帯と思われるところから購入する。鶏舎は常に消毒を励行し、

出来るだけふ化育すうと成鶏管理を同一人でしないようにする等であります。もし万一それらしい病鶏が不幸にして出たら機を失せず、直ちに駐在獣医師か開業獣医師に診てもらって、迅速適切に病源の撲滅をはかるようにしなくてはなりません。二、今後の養豚は積極的な生産費の低減と肉質の改善が問題で、飼養管理面の古い習慣を脱し得ないでいたずらに豚価の上昇のみを待つのでは真の発展は望めないということを養豚家は銘肝してもらいたいと思います。香港輸出豚が現在斤当り二二仙で買ひあげられているようだが、香港豚供給地たる中共並に東南アジアの実情からすれば、沖縄側がそれ以上の豚価上昇を期待することは今後の販路確保と輸出伸長の面において多くの困難が予想されるものであります。又この問題は日本本土の豚価を引合いに出しても云えることで、将来肉豚の本土輸出ということも防疫面の問題は別として一つにこのことに実現の可否がきまるのではないかと思考されます。それではどうすれば現在の生産費を低減することができるかということになります。御存知のように豚の生産費の七〇パ

セントは飼料費によって占められているので、これを如何にして切下げるかということが即ち生産費の低減にかかってくる理です。そこでこれが実現を期すために自給飼料の全面的確保と飼料生産技術の向上をはからなくてはなりません。飼料の確保というのはでんぷん質飼料は勿論のこと蛋白質飼料も可能な限りその自給度を高めて行くことです。甘藷は自給しているが、大豆類、魚粉のような蛋白質飼料は市販のものに依存しているという状態では飼料費の節減は実現し得ない。又例え甘藷を自給しておいても甘藷自体の



1958年の養鶏デーの状況 (於琉大)

生産費が高いのでは何にもならない理です。従つて甘藷作の技術即ち耕種技術というのが養畜以前の問題として、その向上をはかる必要が存するといふことになりませう。この問題について本土と比較してみると甘藷の反当取量が沖繩一、四六五疋(三九〇貫)(一九五六年)に対し日本全国平均一、八九七疋(五〇五貫)(一九五五年)、千葉、茨城両県では二、二五〇疋(六〇〇貫)を突破し、相当の差があります。甘藷の元祖と自負する沖繩もこれでは顔色なしといふところで、反当取量面においてこれだけの差があり、更に畜力機械力の導入と自給肥料を主体にしている本土の場合とでは生産費においても自から相当の差のあることが推測されます。ちなみに本土における飼料と豚価の関係について申述べますと、生体一〇〇匁の価格が甘藷五、五疋(二貫目)の格価よりも高いとき又繁殖豚の場合では仔豚一頭の価格が甘藷二七・六疋(一〇〇貫目)の価格より高いときはそれぞれ諸経費を差引いて十分採算がとれるといわれています。貴方の経営の場合はどうですか、一寸計算してみるのも、反省の資になります。なお参考までに筆者が経済局の資料をもとにして一九五八年一月から二月までの肉豚並に仔豚価格を算出した結果肉豚の平均疋当り四一仙、仔豚疋当り六〇、七仙となっているので附記しておきます。

三、未利用畜産資源の活用について養畜農家はもうすこし研究的態度で当ってもらいたいと思えます。

たいと思えます。ギンネムは蛋白質含量の多い(二六・七%)青草で食草家畜は勿論のこと、豚、鶏にも適量給与であれば蛋白質飼料としての役目を十分果たすことができ、又飼料費の節減にも大いに役立つのです。勿論ギンネムにはモーションという成分があつて、これを馬、豚等の単胃家畜に多量給与すると脱毛現象がおこります。それでギンネムは有害だと敬遠される農家が多いのだが、こういう考えは間違ひであつて常にその給与量に注意し、且つ家畜の反応によつて給与量の追加減をする努力を払うならば効あつて害なしということになります。給与限度については沖繩並びに日本で試験したことがないので明確なことはいえませんがハワイでウサギは一〇パーセント、乳牛に一〇パーセント給与して何ら有害症状が現われなかつたということからすると一応安全度を考慮して、大体、豚では一〇パーセント以内牛では五パーセント以内を目安として給与すれば良いのではないかと思考されます。但しこれはあくまでも目安であるので前述のように給与後の反応をよく観察して給与量の調節をしなくてはなりません。琉大では松田先生がこの問題について只今鶏に実施中でありませうが、一〇パーセント給与区で養育その他に別に異状を認めないようです。試験結果がまとまれば後日詳報があるものと思えます。

四、最近豚に繁殖障害が目立つようになりましたこの事例は各地区共大なり小なりあるようだが特に中部が多いようです。性成熟の時期になつて

もさっぱり発情が現われなかつたり、分娩後発情再起がおこらなかつたり又発情が微弱でなかなかつかめなかつたり色々あるようです。これは実態調査をしたことがないからなんともいえませんが飼養管理の不手際からきたのが多いのではないかと推測されます。家畜は改良の度が高ければ高い程、がいつて抵抗力が弱くなるのであるから、純粋種を飼えばそれだけ周到な管理が必要となります。なお本土ではこの種の豚に妊馬血清ホルモンを注射して発情をおこさせることに成功しているということです。沖繩では未だ試験されていませんが近く琉大で実施する予定です。

(石垣長三)

お願い

当所に保管の「農家便り」に次の欠号がありますので、御持の方は何卒御譲りください。御礼に普及双書を差上げます。

宛先 琉球大学農学科普及係

欠号

一九五五年二月号

一九五六年一月、二月、三月、四月、五月、六月、七月号

一九五七年二月号

一九五八年三月号

発行所 琉球大学農家政工学部

発行人 島袋俊一

印刷 沖繩タイムス社

指令第一九八〇号

一九五九年九月二五日印刷

一九五九年一月一日発行